
Wicca・Craft

モチゴメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W i c c a ・ C r a f t

【Nコード】

N 1 3 4 7 X

【作者名】

モチゴメ

【あらすじ】

モラトリウムにあぐらをかいて、社会的責任もなく、気軽で、自分のとるに足らない些末事こそが世界の問題であるかのように語り明かせる。

ああ、なんということか。そんな高校生の放課後。

放課後、生徒会室はオレンジ色に染まる。
夕日、斜陽。傾いた太陽。

当然のことながら、部活動もせず、椅子の上にあぐらを書いて、欠伸をする。

長々とした校長の朝礼から始まった月曜日。その放課後。

とはいえ、これこそが日常。なにか変わるでもなく、なにか起きるでもなく。

青春と情熱を浪費する毎日のただの一日。
今日も今日とて、そんな日の筈だった。
そう。そのはずだった。

1. S h e i s a w i t c h .

「肴菜くん」

「なんですか、芒月先輩」

「私が魔女だって言ったら、驚くかな？」

「いいえ」

「え？」

「え？」

「ごめん、なんでもない」

彼女は。ササヅキコウメ 芒月小梅は。

笑いながら。キクサカサカナ 菊盃肴菜に。冗談を言った。

それを少なくとも肴菜は冗談だと思った。
よくわからん。

何を。何故こんな事を言ってるのか。全く。

それが、ファーストインプレッション。

2. As you can see.

「えっと、その顔は、もしかして信じてもらえてない、かな？」

「はい。全く。だいたいですでに一部界限では魔女呼ばわりでしょう
が」

アイシクルウィッチ エターナルフォースプリザード
氷の魔女とか永久凍土の女王とか、厨二病ですか。

「だから信じるもクソありませんよ」

当たり前。

至極当然にして単純明快なまでに明示している。

それが。この表情。

変なこと言ってるやつを目の前にして変な顔をしないわけがない。

これが普通なのだ。

そして、彼女の眉尻がさがる。

「……えっと、ずっと見つめられると少し恥ずかしいんだけど……」

は？

「あ、あのね、いくら魔女でも照れるんだよ？」

知りませんよそんな事。

3. And so.

「失礼ながら、芒月先輩。一言いいですか？」

「あ、うん。何かな？ 先輩何でも答えちゃうぞ。あ、え、えっちな以外の、だけど……」

「……もういいから帰ってください。放課後ですし」

めんどくせええええええええええええええええ。

4. where on earth?

「具体的にどういうことなんですか」

「えっと……どう言えばいいのかな？」

知りませんで。本当に、まったく、これっポッチも。

「それを知って何になるんです？」

「いや、特に無いんだけど……えっと……怖いかな？」

「いいえ全く」

「えと、本当に？」

「はい」

幽霊とか信じていないし。

「そ、そっか……………えへへ」

……………「一九番したら、魔女狩りしてるかな？」

5. Objects changes.

「By the way, 一つ聞いていいかな?？」

「本を読んでいます。今」

見てわからないものか? あと、なぜ英語?

「それはわかるんだけど、逆さま、だよ?」

……………

「なんですか?」

「あの、その……私のこと、どう、思う？」

うわあ。

面倒くさい。

「君は私のこと、どう思ってる？」

「先輩です、芒月小梅。それ以下でもそれ以上でもないです。」

SUSUDUKI、って言い難い。

「生徒会書記で成績優秀、生徒会長以上の支持率を誇る『氷の女王』
、生徒会の影の支配者にして、現生徒会の高支持率の原因。そのせ
いで会長はジリ貧気味かつ傀儡^{かいらい}呼ばわり。でも実はかなりのドジっ
子で、二重人格。そんな感じの認識です」

「人格は一人だよ……うう……」

そんな格好しないで下さい。ウルウルもしないで下さい。写メって
回しますよ。

「じ、じゃあ、どう想ってる？」

漢字って大事だね。それぞれに意味がある。

「……めんどくさい」

めんどくせー。

6. Don't bully me.

「ひどいよ、意地悪だよ」

「僕は嘘をつけないので」

本音です。

「公約掲げて生徒会長になったの、肴菜君だよ？」

貴女が辞退したから繰り上げ当選したんですよ、有効得票数の九割以上貴女の票だし。

あれ、今それ関係なくない？

「嘘はダメなんだよ？」

だから本音だって。

「嘘は、ダメなんだよ？」

本当に心から本音です。

「ダメなんだよ？」

えっと、怖くないですからね。

てーか、貴女のCoolっぷりこそウソでしょうに。

そのギャップはこの部屋限定ってのもキツイ。

ギャップ萌え独占ですか……

「嘘だよ、ね？」

あーもーはいはい嘘ですよ。小梅たん萌えー。可愛い可愛いチョー可愛い。

世界で一番可愛いよ。

ソンナニオレヲイジメナイデクダサイ。

7. Cool beauty.

「まったく、君は身持ちが堅いな。いや、それが悪いわけじゃないんだが」

そしてクールな、いきなりいつもの彼女。完全無欠のクールビューティー。

「何ですか、いきなり」

「ギャップ萌え、とか感じない、かな？」

「いえ、まったく」

「おや、そうなのかい？ 男子なのに淡白だね」

かんらん、彼女は笑う。しかし、いつもの彼女はまるで「大人」だ。

「……それともやはり、色気より食い気かな？」

ああ、もう、首をかしげないでください。ふくみ笑みを浮かべないでください。加えて腕を組まないでください。

「ああでも、色気がよかったら言ってね？ その時は……えと、見せて、欲しい？」

そう言って。

平均よりも短めのスカートの先をちょいっと摘まんで、あげて見せた。

ぎりぎり見えない程度の、ほんの少しだけ。

ニーソックスの太もも。その、プクツと膨らんだ所。

肌色と、それが仄かに透ける黒。

「れ、れも、えっちなのは行けないと思う、よ？」

興味ない。

とは言わないけれど、顔真っ赤にしてまでたくし上げかけないでください。てか噛むなよ。余計に赤いんですけど。

だあああ、だからいいから降ろせっての！！！！

芒月小梅は、見ての通りの美少女で。

スタイルもいい。好みかどうかは明言しないけれど。

その分、高嶺の花。性格もキツめで、友だちが少ない。

はず。

菊盃肴菜は、見た目こそ普通。だと思う。

染めそこねた髪に、表情の薄い顔。

素行は不良……だと思われる、らしい。

そんな二人の放課後。

8 t o l l

認知し許容することとは、自らのものとして消化すること。
世界観なんて、自分の見える主観の中にしかない。

だから、世界を受けいれるなんて、実は簡単なんだと彼女言った。

栄養が回っていないと、やっぱり脳みそが動かない。だから、こんな中学二年生みたいなことを思い出したりするんだろう。

昼飯、食いそこねた。しかも貫徹でゲームしてたから、眠い。

オレンジ色の生徒会室で、腕を組んでウトウトしていたら、彼女がまた、やってきた。

いつもよりもかなり遅い。しかも私服だった。

8. J u s t f o r y o u .

「おはよう、肴菜君。今日はなんだかアンニュイな顔をしているね。
お昼でも食べそこねたのかな？ ゲームで寝不足かな？」

もう放課後です、小梅さん。というか、大人なモードですね。

「なぜ知っている、みたいな顔をしているね」

心を読めるのか、コウメ・ル・フェイ自他称魔女　め。

「肴菜君を観察しているんだから、それくらいわかるさ」

このストーカー……いや、魔女め……

「それで、どうするの?」

「さっさと帰って、ごはんを食べることにします」

家では一人ですけどね。

「一人で?」

それはまあ、両親共働きの鍵っ子ですから。チンして出来合いの物をご飯と一緒に。

「寂しいね?」

まあ、それはね……ていうか、言わないでください。もう慣れてきたんですから。

「それでね、君が一人で寂しいと思って……あの、その、こ、これをね、急いで作ってきたんだけど……一緒にどうかな?」

白地に黒ウサギ柄の、少し派手な布。少し大きめの包み。

そんな、お弁当だった。

9. i n s t a n t.

「……ものすごく、手が込んでますね」

「そ、そうかな？」

さすが魔女。二段になったお弁当箱の中身は、どれも自分がいつも食べているようなものとは全く違った。

とても手の込んでいるようで、とても美味しそうで。

つまり、生鮮食品。

コンビニ弁当や冷凍食品、栄養ドリンク、携帯食品、惣菜パンで生活している俺には馴染みの薄いものだった。

さすがにこれは

「……ありがとうございます」

「え、えへへ」

終業から一時間しかたっていないのに、本当に。よく作れたな。

「で、でもね、半分以上は前作って冷凍してたものを解凍したやつなんだよ?」

「……Whats?」

まあ流石に魔女であっても、短時間でこんなお弁当、一からは作れないか。

でも美味しそうだから良いか。

「あ、愛情こもってるかりゃ!」

そんなに赤くなるなら言わないでください。というか噛むなの。

10. Delicious?

「とにかく、はい、あ、あーん」

そう言って彼女は俺の近くにやってくる。

差し出された箸の先には、いい匂いの唐揚げが。

……これをこのまま食べたら、負けの気がする。

「自分で食べられます」

「嫌かい？」

そこで大人モードですか。切り替えのスイッチは何処にあるんですか、全く。

「嫌です」

「そっか、いやか……」

そういった彼女は、口を軽く開けて俺の方を向いていた。

「あ、あーん」

目をつぶって、ホンノリ頬を赤らめて。

「いただきます」

だから俺はそれを無視して食べ始めた。
すごく、美味しかった。

11. Bon appetit.

もう夜の帳も降りかけてている。風も、涼しい。

「ご馳走様でした」

「あ、お、お粗末さまでした」

量も質も、いつもの食事よりずっと美味しかった。

何気に、魔法瓶に味噌汁まで入れてきてくれた。これは、出汁からきちんと作っていたそう。

……正直、おふくろのより美味かった。

「えと美味しかった？」

ニツコリと笑う。

「はい、とても」

「あ、え、ありがとう」

「どういたしまして」

彼女は、なにか納得いかない用で。

ふむ。事実美味しかったし満腹感の気持ちいい余韻を味わえている。ううむ。

俺は非常に満足なのに。

「えと、珍しく素直だね、肴菜君」

素直なのは珍しく無いでしょうが。

俺は嘘はつきませんよ、少なくとも意識的には。

「一言余計です」

「あう」

ずびし。チョップをした。

その日、寝たのはまた深夜だった。

それでも、夜食を食べなかったのは久しぶりだ。

彼女の弁当は何時もの食事と違って腹持ちがよく。夜まで気持ち良かった。

また食べたいと思ってしまって、少し顔が赤くなった。

Why?

とにかく、お礼ということだ。

俺は彼女に缶コーヒーを買っていった。

12to16

欠伸をかみ殺しながらねむけを殺しコーヒーを啜って筆をすすめる。

三角関数を合成し、二重根号を外し、分数関数を積分し、増減表を書いてグラフを作る。

つまりは数学。いや、数が苦。もう、ユークリッドもソクラテスも憎たらしくて仕方ない。

オレンジ色の生徒会室で、俺は億千万にも及ぶ呪詛の言葉を並べ立てながら赤点の補填課題を解いていく。

いや、間違い。正確に言えば……いけない。口癖移ってしまった。とにかく、解けなくても数字や α 、 β 、 $\int$ 、 Σ 、それにCをせきぎんていすう並べていく。

わからん。まったく。オレンジ色の生徒会室で苦悩し唸っていると、彼女がトコトコとやってきた。

12. Homework.

「コーヒー、ありがとうね」

「いえ。あのお弁当に比べれば。あんなもので申し訳ないです。ま」

「ま?」

「まー!」

視線を向けずに、言葉だけでそういう。お礼を返す態度じゃないって?

いいじゃないか、別に。

言いそうになって、恥ずかしいとかそういうことじゃない。

「ま、まー! 肴菜君、数学苦手なのかい?」

「ええ。これが嫌で生物専攻にしたんですから」

得意科目は英語と生物ですから。ああ、掛け声合わせてくれてありがとうございます。

「え、えと、保健体育そついうえつちぎょうこの性教育は、生物には入らないと思う、よ?」

「やかましいんで黙っててください」

健全な青少年だからって、そんな方向には暴発しません。

「あう」

だいたい物理選択がそんなところにかぎって興味持ってんじゃねえ。

「……た、正しい知識は必要だと思います!」

そう言って。俺の下半身をチラ見して。

「……………」

顔真っ赤にしてそんな事言わないでください。ソッチの方で貴方には何も求めていないんで。

っーかただの変態じゃねえか!!

13. Thoughts.

「っーかただの変態じゃねえか……」

思わず口について、さっきの思考が漏れて出る。

呟きほどの声だけれど、魔女の地獄耳には捉えられたようで。

「へ、変態じゃないよ!」

覚めることなく、顔真っ赤っ赤。

「さっきの言動の端々から変態以外の答えがでないんですが」

この間のスカートとか、思い返すと、意外と大胆な発言も多い。最近はその性的にオープンな女性が多いと聞くけれど……

「まさか生徒会室以外でもそんな言動なんじゃないかと思うと……はぁ」

「ち、違うよっ!……………肴菜君に対してただだよ、こんなふうに

言えるのは」

なぜ、そうなる。
なぜ、うつむく。

14. Naive.

「……」

「……」

アレから時計の長針が少し進んだ。多少、いやかなり気まずい。
芒月先輩は何も話さず、うつむいたまま。
俺はどうにも手が進まず。

「……あの」

「……」

「……ええと、先輩？」

「……」

「……ぐすん」

口で言うな、と言いたいけれど。でも、やはり、これは。

ああ、間違いない。責められている。

失言は……ああ、まあ、有るといえば、在る。

「すみません、失言でした」

「……傷ついた」

「悪かったです」

「私そんな女の子じゃないよ」

「わかってます」

考えてみれば、彼女はここ以外では氷の王女クールビューティなのだった。
そんなこと、他で言っているわけがない。

「ほんとに?」

「はい」

「じゃあ……一つお願いを聞いてくれるかな?」

そういった彼女は、まるで泣きそうな目でこっちを見て。

15. wish.

「小梅」

「はい？」

そう言った。なぜ自分お名前をおっしゃるのですか、先輩。

「今度から、小梅って」

「呼べと？」

「呼んでくれてら、許してあげる」

なんだその笑顔。まさか……謀ったな、シ〇ア！！

「はぁ……」

ため息をついて、俺は自分の勉強机の下に視線を向けた。

ボケボケの天然さんでも、この人は魔女だということを忘れてた。かなりの成績優秀者だということを忘れていた。

全国有数の、超高校級の頭脳の持ち主だったんだ。

間違いなく。

しかも天才型ではなく、秀才型の。

「これ以上遅れると死活問題です。もしかた似たようなことをしたら千切りますからね、小梅……先輩」

「……先輩はいらないよ？」

こういう線引きなんです。一応、はじめなんです。

16. help me.

「……そんなこと言ってたら、本当に間に合わなさそうじゃないですかこのやろう」

そう言って、俺はまたペンを走らせる。そんな俺の横にやってきて

「手伝おう、か？」

ニツコリと笑う。久々に彼女が俺に対して優位なポジションを得たからだろう。

無論俺ではオトナモードには敵わないけれど、ドジっ子小梅たんぺろぺろには勝てるのだ。一応。だから久々。

では、スーパ―言い訳タイム。

ああ、もちろん負けた気がするとも。このドジっ子に教えを請うて、教えてもらうのは。

でも、提出期限は明日の昼まで。しかも、家に帰ったら攻略途中のゲームをこなさなくちゃならない。じゃあ、本当に、仕方ないじゃないか。

「お願いします」

すっげえ驚いてる。

悪かったな。本当に苦手なんだ。数学なんて死んでしまえ。ゲームのアルゴリズムくらいなら暗算でできるんだけれど。

「……えっと、じゃあ、小う」

「じゃあ、ここからお願いします」

「あうう……意地悪だよ、肴菜君」

といいつつも、彼女は自分の筆箱を取り出して俺の隣りに座った。少しイイ匂いがした、などとは微塵も思っていない。本当に。全く。これっポツチも。

意地悪だとか、酷いだとか、散々に悪態をつきながらも。

彼女は懇切丁寧に解説してくれた。時折大人モードになって揶揄ってきたりと何だかんだで飽きずに楽しくやれた。俺が数学を楽しむ日が来るなんて、ありえないと思っていたから。

目からウロコだった。

答えを直接教えたりしないのは、俺の学力向上を思ってくれてのことだろう。

オレンジ色が遠く黒紫に変わり始めた頃、やっと終わった宿題を鞆にしまい込んで。

途中まで彼女を送って、家に帰った。

その道中の終始、俺の右手袖を握っていたのは、俺が両手をポケットに突っ込んだままだったからだろう。

家のすぐ近くの交差点。横断歩道越しに住宅地の自宅の辺りをぼーっと眺めていたら。

そういえば学校の外での彼女のことを何も知らないことに気がついた。

Call to M

『驚いたね。君からかかってくるなんて初めてじゃないかな？ いやはや、とても驚いたよ。最後に電話したのもずっと前だったからね。半年かそこらだよな？ ああ、ついさっきまで『あっち』で会っていたのは、確かにそうなんだけれどね。でもね、『ワトキンス』。我が左腕、無双の杖。僕はヴォイスチャットよりこっちのほうが好きなんだよ。ほら、ロールとかヴォイスチェンジャー無しのほうがいいじゃない、放す時は。まあ、これは僕の個人的な極限れた価値観ではあるんだけどね。君とおんなじだと嬉しいな。ほら、国の違いは文化の違い、文化の違いは価値観の違いじゃない？ 『湯水のように…』って言葉もそこ中東の、ほら、アクシズブランド枢軸産地帯の辺りだと意味が違うでしょう？ そんな感じなんだよ。ああ、いけないいけない。また喻え話で時間が過ぎてしまうところだった。朝も早い学生さんには、その忙しい日常においてもよく寝よく食べ、そして大いに学んでほしいからね。にほんの高校生は大変なんだろう？ 僕にはもう過ぎ去った頃の話だから、思い返せば嬉しくもあり恥ずかしくもあり、いやはや、いやはや。ああ、ところで我が忠臣ワトキンス。…ワトキンス？ ワトキンス！？ まさか、君！ また受話器を離して聞き流しているね！？ 酷い、酷いよ君！ この前もそうだったじゃないか！ いいよ、それなら君が聞いている何かより大きな声で高らかに歌うまでだ！ ミーリさんのヒッツッジ、ヒッツッジ、ヒッツッジ！ ミーリさ』

「やかましい！ 歌うな、というかハンドルネームで呼ぶな！」

『んん、やっぱりリアルだとキャラ変わるねえ？ そうは言うがね、こっちは午前五時前でしかも船の上、高度数千フィートを航行中なんだよ？ ワンコールでとったことを感謝して欲しいんだけど？』

「それが歌うことにどう繋がるのか教えてくれ」

『もちろん特にはつながらないよ？ ああ、そういえば。メリーさんの羊といえ、白^{ホワイト}いお髭の機械人形のアニメの主人公が歌っていたよね？ 僕はアレが結構好きでね。一応シリーズは全て見えるんだけど、アレが最高傑作だと思うよ。次点で×^{ベケ}か神かな。ああ、揚げ物は嫌いだよ。見る気がしない』

「ええい、そっちはどうでもいい」

『あらら。まあいい、とにかく本題に入ろうか。What brought you to call me in this late at night? (こんなおそくにどうしたの)』

「お」

「お?」

「女の子へ、お、贈り物の、まあ、そんな感じのものの相談がしたくてな」

『……………』

「おい」

『いや、すまない。君がそんな事を言うとは思わなかった。うん。驚いたよ。戦艦^{おんなのこ}が、それも単艦^{ひとり}で外宇宙^{エッジワース・カイパーベルト}領域の宇宙怪獣を倒しきった時よりも驚いたよ』

「そんなにか」

『そんなにさ。しかし、それなら我が右腕にして君の相方、忠義の剣『アルドレッド』に相談したらよかったんじゃないか？ 少なくとも僕より君に年が近くて、しかも彼女は女性だろう？ 僕と違って』

「それはまあ、そうなんだが、なんというか、その」

『歯切れが悪いね。まあ、照れくさいってことなんだろうけれど』

「分かってんじゃないか！」

『当たり前じゃないか。こう見えて僕はもう大人なんだし。それに君は僕の仲間の一人なんだし』

「よくそんなストレートに言えるな」

『それが僕の僕所以だよ』

「……まあ、納得しておいてやる」

『ありがとう。まあ、それはそれとして、どういう意味合いでのプレゼントなんだい？ 愛の告白？ エンゲージ？ プロポーズ？』

「な！ アホか！ ……そういうものじゃない。お礼だ。勉強を教えてもらったただけだし、その、御礼だ御礼」

『御礼？』

「次活字ボケをしたら電話を切って着拒、ギルドを抜けてGMにギ

ルドの裏帳簿送るからな」

『ごめんごめん。まあ、なるほど。そういう事ならあんまり込んだ物じゃない方がイイね』

「だから分からなくってな」

『ふうむ……なあ、何がいいかな、梅桃^{ゆすら}? ああ、うん……ああ、なるほど。そういうのもありかな。なるほどなるほど。そういうのはいいかもね。ありがとう』

「梅桃?」

『娘。僕のところの長女』

「はあ!? む、娘!? しかも長女って」

『そ。二人いるよ。今年で十八歳の長女と十四歳になる次女あいるよ。ああ、まあ、それはともかく。それでね今聞いたんだけれど、君がなにか作っていつてはどうか? クッキーとかそういうの。男の子がそういうのって僕的にはキュンキュンするけれど』

「……なるほど」

『じゃあ、頑張ってるね。僕も君の手作りって食べてみたいけれど、まあ、それはまた今度の機会に。その時は僕のために作ってね?』

「藁人形を?」

『言ってしまったら、呪詛^{あなふたつ}返しなんじゃないかな?』

「……こちらからかけておいて何だが、もう寝ろ」

『酷いなあ、もう。まあでも、僕も明日、いや、今日か。とにかく早いしね。二時間後には会議始まっちゃうもの。それじゃあ、オヤスミ』

「ああ、おやすみ。ああ、あと」

『ん？ なあに？』

「ありがとう」

『いいえいいえ。じゃあ、オヤスミのキ』

ガチャン！

C 1 t o 5

別に、あの弁当とか、課題とかが転機だったというわけじゃない。ぼ：俺はそれなりに先輩に世話になってきた。生徒会の雑務以外にも、主に暇つぶしに。

やけに南九州の名前のついたキャラクターが戦いまくってる生徒会漫画や、一存とか円卓のようなライトノベルじゃあるまいし。

それに俺たちのようにメンバーは高校生だ。

生徒会に与えられている仕事なんて、殆どが「後片付け」とかそういうこと。

例を挙げるなら、部活の予算作成とか。高校生に大金いじらせるなよ。

総生徒数五千人以上。ともなって、総部活数も三桁在るとかないとか。

そんなものの予算編成なんて出来るはずがない。

目は通すけれど「一応」^{たてまえ}でやることだし。

まして生徒間のいざこざなんて対処してられない。

はあ。

でも一応のレベルでは、それなりの量の書類仕事があるわけで。審議して、判子を押すのもあの量だと本当なら大変なんだろう、と思う。

なんで「思う」なのかといえ、実は先輩がかなりの量を簡略化してまとめ上げ、大体十分の一ぐらいにしてくれているから。

ほんと、俺の下なんかで働く意味があるんだろうか、この人。

兎に角。会長って、なってみても良いこと無いんだよ。本当に。

そんな事を思いながら、オレンジ色に染まった長い廊下を歩いて行く。

生徒会室がこんなに奥まったところにある意味って……

なんて思っていると、ふと思い出す。

ああ、でも。

この生徒会には唯一、漫画みたいな所があったんだった。

それが「執行部」の存在だった。

1. S o c a l l e d ” C h e r r y B l o s s o m ”

甲高い風切音を唸らせて、ゴム底のはずの上履きから火花を散らして。

後頭部に飛びついてきた。

「菊盃ア肴菜アアアあああああああああああああああああ

「ちょっと静かにしような？」

なんなのだろうか。このハイテンションは。

その成分を二ミリグラムでいいから分けて欲しい。飲む気はないが。

「ダメっすかね!？」

「駄目だ」

「でも、語尾に――!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!! (エクスクラメーションマーク) ないと落ち着かないん
すよねー!」

ケラケラという形容詞がこれほど似合う人間もないだろう。
明るい顔に破顔一笑。まんめんのえみ

そんな事は知らないって。でも話しくいだろうなと思った。

3. What's wrong?

「そういえば浮かない顔っすね、さかなさん!」

「先輩とちゃんと呼びなさい」

「先輩！」

「よろしい」

「で、何かあったんすか!？」

「ああ、まあ、なんというか」

「珍しく歯切れ悪いっすね!？」

「ああ」

そういえば、こいつも女だったっけ。一応。

一般的な概念から考えてかけ離れていそうでも。

ならば、何が欲しいか聞いてみるのも一興かもしれないじゃない。
なにせ、わたす相手も普通じゃないんだから。

「なあ、俺がなにか手作りの物をプレゼントするとして、お前なら
何が欲しい？」

そして彼女が一旦フリーズした。可笑しい。この脳筋が、勉強以外
でフリーズするとは。

そして千愛里は大きく息を吸って。

「ほあああああああああああああああああああああああああああ

んでも嬉しいっす！ 練り消しから石油採掘基地まで、何であろうと！ でも食べ物だとよけいに嬉しいっす！」

そこまでは出来てたまるか。

「そこまで酷いものはやらないし、そこまでのすごいものも出来ないが……食い物か。クッキーとか、か？」

無難かつ、作りやすい選択。レシピさえ見れば、失敗しないだろうし。

「まさか作ってくれるんすか！？」

「欲しいのか？」

「無論！」
いふまでもなく

というわけで。

先輩にお礼をわたすために、まず千愛里に何か作るというプロセスが必要となったわけだ。

ああ、蛇足だった。

5. But why?

「しかし、どういう風の吹き回しなんすか!？」

「何がだ？」

ここまでのやり取りに、疑問点があったとすれば。

それは千愛里のエクスクラメーションマークへの執着ぐらいだ。

ほかに、あるだろうか？

「いきなりプレゼントだなんて！」

「ああ、実は日頃のお礼にと思ってな。先輩に何かあげようかと思
つてな」

「え」

一瞬、千愛里が固まったのは何だったのか。

正直それは分からなかったけれど、一瞬をおいて復活した彼女には尋ねられなかった。

生徒会室までの廊下も残り短い。その間に、俺は千愛里に何が食べたいのか、どんな味が好きかを聞いた。
彼女は生徒会室に決して入らないから。

「しっとり焼いたシナモンシュガー味のハードクッキー」

明日からレシピを頼りに作ってみよう。

そんな事を思いながら帰宅路に行く。

その途中で、また千愛里に抱きつかれた。

17 to 20

仕方ないじゃないか。眠いんだから。

ソファの上で、足を投げ放して、ゴロゴロとしている。

あれからもう何日目だっけ……一〇〇時間は絶対起きてるはず。

コーヒーもモカも、睡眠打破さえも効かない。眠い。眠すぎる。

仕方ないじゃないか。失敗するんだから。なかなか難しいんだよ、こういうのは。

でもなんとか完成したし、いいじゃないか。

オレンジ色の、遮光カーテンブラインド越しの揺光は心地いいぐらいに薄暗く。

うつらうつらと、意識が、飛ん、で、あ、ああ……

17. Bed-bugs bite.

何といえど……ああ、ほら、アレ。目の前にシャーペンとか、そういう尖ったものが眉間に近付いてきた時のような感じ。

目頭がジンジンする。

あれ、すごく苦手なんだよね。

後頭部にもなんか変な感じ。今気付いたけれど。

と、ふと目を開ける。

「とまれ Halt」

「あう」

小梅先輩が、真っ赤な顔が目の前にあった。
タコ唇で、震えながら、意を決したかのように。

それに人差し指を押し当てて、とりあえず押し返した。

「なんのつもりですか？」

「えっと、その……約得かな、って」

なんのやねーん。

18. Lap pillow.

彼女の胸元越しに顔が見える。俺は真上を向いている。
知ってる天井だ。見知った顔だ。知ってる、そして落ち着く匂いだ。
でも。

「なんですか、これは？」

「えっと、膝枕？」

そういえば、そうか。
ほのかに温いし、弾力があるし。だいたいそれは分かるってば。ヴ
あ。

……WHAT?

「えっと、イヤかな？」

「いえ、気持ちはいいですが、何故ですか？」

「約得かなって」

なんのやねーん。

「なんの約得なんですか？」

「えと、生徒会書記、いや、成績優秀かつ教職員からの信頼厚い優
等生のかな？」

スイッチ入ったー！

目付きとか雰囲気が変わるんで、いきなりはやめて欲しい。
本当に、別人みたいに。

凛々しい口調と顔つきで、小梅先輩は視線を外す。まっすぐと前を
向いて。

「私はね、自分で言うのも何だけれど、品行方正にしているよかつ
たと思っているよ。何せ」

そう言って彼女は、再び俺の顔を覗き込む。切れ長の目が、ずっと

通った鼻梁が、近い。

綺麗な髪がオレンジ色の光を遮って、俺の顔にも垂れ下がる。

擦りたい。顔も、気持ちも。

「君とこうやって放課後が過ごせるから。これ以上の役得はない、よ？」

目の前で、クールビューティーが、照れていた。

「な、あ、その」

言葉がでない。呂律が回らない。舌先がしびれてる。

そんな風に、そんな直線ストレートに。

何を言ってるんだ。本当に何を、何？

「えっと、照れるね、こういうの」

「俺のほうが照れます」

「え？」

「照れますよ」

「あ、えっと……照れてくれるんだ。えへへ」

何をそんなに。嬉しそうに、喜んでくれるんだろうか。

19. Her emolument.

ああ、ムカつく。そういう風に、手駒に取られるのは。
この人に。この調子に。

よし、ペースを崩してやろう。
役得ってことで納得してくれるかもしれない。

正直、かなり日にちが空いていた。それだからか、タイミングが掴めなかったってのは本当だ。
だからとても丁度いい。よし。渡してしまおう。

でも、起きたくはなかったから。

「小梅先輩、俺のバッグのなかのヤツ、取ってもらえますか？」
「えっと、これかな？」

彼女に少し、手を伸ばしてもらった。
前傾したからか。彼女の胸が、近付いてくる。

これが、俺の役得、だろうか。

「いえいえ。というか、そんなに驚かないでください」

「えと、中身を聞いて、も？」

「クッキーですよ。自信作です」

「あ、ありがとう」

終始にやけ笑いを顔中に張り付かせたまま、事務仕事をする彼女。困ってしまったのは、彼女が起き上がらせてくれなかったことで。

右手でペンを走らせて、左手で俺の髪を撫でる。そんな彼女。

こんな状態で、寝るわけにもいかず。

心地いいのに。

こんな状態で、先に帰りたいといえず。

寝不足なのに。

彼女が拘束から開放してくれたのは、事務仕事が片付いた後。

オレンジ色のかけらもなく真っ暗な空に、三日月の登った頃だった。

夜の帰り道。それはことさら寒くって、暗くって。
小梅先輩が握ってきた右手だけが、妙に熱くて心地良かった。

C 6 t o 9

地響きか、地鳴りか。まったく、よくもまあ廊下が踏み抜かれ
ないものだ。もしかしたら、高速道路の高架下の方が静かなんじや
ないかってくらい。

そんなレベルの騒音を掻き立てて走れる人物は、俺の少ない友好
関係の中では、知りうる限り一人しかない。

ライオンズ・シックス サイケデリックスパークプラグ ソニッカ・マズルカ
獅々^{サム}髪の魔弾、黄昏時の導火線、音速の魔女、桜色^{さくらふぶき}旋風、桜幕^{チェリープロッ}千愛
里。

これが「自称」なのだから、恐らくは真性のものなのだろう。
それなら、俺もそれに習って。

黄昏色に染まった回廊。遙光の揺れる中を、魔女が走る。
それまるで……まるで……ああ、無理！ 俺には無理！

先輩もこないの、もう帰ろうと廊下を歩く中。

オレンジ色に染まった長い渡り廊下で背筋に冷たいものを感じて、
脇腹の痛みに打ちひしがれていると。
背中にすごい衝撃を感じた。

6. Her style.

「肴菜センパアアああああー——————」
「——————イッツツツ！」

両側から回される、カーディガンの袖と細い指。ほんのりと、冷たくていい匂いがする。

右耳に当たる吐息と、黄色い声。「比較的薄め」だが、間違いなく感じられる感触。

抱きつかれていると気がついたのは、

「重いんだよこの野郎！」

「アタシ重くねーですし！ 野郎じゃねーですし！ ピッチピチの女の子っす！」

その腕を支点にプランプランと揺れる揺れる。背中でごすれて、「比較的薄め」の「もの」が形を変える。

「実際、背中ではわかるっしょ！？」

「薄い」

「うわあ、マジショックっす！ 薄いほうがステーキタスなんすよ！
？ 希少価値なんすよ！？」

言う割には、落胆という感じでも、ましてやショックという感じでもなく。

「まあ、大きい方が気持ちいいみたいっすけどね、殿方は」

彼女はかんらんかと笑っていた。

7. I don't care.

「そういうのは俺が普通考えるもんだろう」

お前が考えることじゃあ、ないだろう。オッサンじゃあるまいに。殿方じゃないしな、お前は。

「肴菜先輩はどっちが好きなんすか!？」

「大好きだね、大きいの」

『大きいの』を強調してみる。本当のことを言うと、こだわりはない。

それに、正直千愛里のスタイルが悪いわけじゃない。

見た感じは、普通よりずつといい。

だが、「比較的薄め」。間違いなく、「比べてみると薄い」。

膝枕の位置から見ていたのと、背中の感触から比べるのもどうかと思うけど。

だが、こればかりは間違いないはず。

「どうやって開けた!？」

「素手でガバーっ、とっす! ホンの少し熱かったっす!」

「まさか健全な高校生クライムのエロ本をゴム手袋カタリストなしで!？」

「というわけで、触ってみます!？」

「触るかよ」

どういうわけだ胸を張るなこの不法侵入者。いくら近所かつ母親に知られてるからって、だからってそれはないだろう。

「逆にセンパイの気に障ってみました!」

その発言が気に障るっちゅーに。

「ふーっふっふ!」

「あのなあ……そろそろ本当に」

「触るんすか!？」 熟す前の青い果実を貪るように揉みしだくんすね!？ 新雪のように未だ前人未到の頂を、絨毯爆撃のように蹂躪し尽くすんすね!？ ああ、千愛里ちゃんの純潔は如何に!？ 次回、黄昏チェリーブロッサム第七話『暁は鮮血に染まる』G Oご期待!？」

何その新番組。ああ、しかも厨二病が悪化かつ活性化している……というか、それ以上に

「誰が貴様の純潔などいるか！ 加えて、『乞うご期待』であって『G oご期待』じゃない！」

そんなこんなしていると再認識させられる。桜幕千愛里は、やっぱり馬鹿だ。

9. S i g h.

「はぁ……」

「お突かれさまつす！」

「字が違う」

漢字は大事だ。それぞれに意味がある。

「じゃあお憑かれさまつす！」

何にだよ。ああ、魔女か。しかもどっちも厄介な。

「そういえば肩が重いな……」

「まじっすか!？」

「お前が乗ってるからだけどな」

肩に手を置くだけならまだしも。背中に抱きついて、体重をかけやがって。この後輩め。背中の、重なった部分が暖かい。

「センパイ!？」

「ん？」

「重いだけっすか？」

そんな事はない。健全な男子高校生が感じるぐらいには、色々と感じている。

でも、コイツは後輩だから。俺が早生まれでコイツが4月生まれだから、誕生日も一ヶ月違いっただけだけれど。それでもコイツは後輩だから。

「重いだけ、なんすか？」

「……」

「ん」

そう言って、俺の首筋に千愛里の前髪がかかる。鎖骨に、顔が押し付けられる。肩に置いていた手にもっと力がこもる。

なんか、吸い取られている気がした。

「じゃあ、今日は帰るっす！」

そうして、潔く帰る宣言をした。

「それじゃあ、また明日」

「また明日っす！」

そう言って。

軽く、俺の、頬に。

キスを、した。

いきなり。

何ってことを。

振り返ってみると、そこにはもう姿も影すらもなく。

背中に体温が少しだけ残っていただけだった。

寝よう。暖かくして、久々にシャワーでなく風呂に入って。なんか、疲れた。突かれた。憑かれてしまった。ああ、間違いなく疲れてるな、寝よう。

顔が赤いし、胸が熱いし、そして頬が火照っているのもそのせいに違いない。

だから、帰ったら即効で床についた。

翌朝。

俺は目覚ましに起こされるのではなく。久々に帰省したアイツに起こされることになった。

「やあ、もう朝だよ。正確に言えば午前七時二十六分だ。起きなくてはヤバイんじゃないかな？」

そう言って布団と枕を取り上げられて。

「おわ、さつむ！」

「下には暖房が、正確にいうとコタツあるから暖かいよ？」

「お前の言い方が冷たいんだ。絶対零度か？」

大人モードの魔女さまほどではないが。

「言葉に温度はないよ。正確に言わずとも」

相変わらず、辛辣なことで。

胸がもやもやする。胸焼けか？ 理由は何だろうか。

飲めないのにブラックのままコーヒを一気に煽ったからか。

一昨昨日やまふとことしの放課後から週末を利用してゾンビ映画のレイトショーを三劇場ほどハシゴしたからか。

それとも久しぶりにアイツせいたいかかくへいきの作った飯を摂取したからか。

あの麻婆豆腐。白いはずなのに、豆腐ですら真っ赤。

臭いが目に沁みる。陶器製の蓮華なのに、一度よそっただけで真っ赤に染まった。

これおかしいだろ。まだ辛い。三日前に食べたのに。

それとも、オレンジ色に染まった視野の中視界の先。

体育館裏の影の中で、先輩が見知らぬ男子生徒と合っているからか。

理由がわからない。でも。

もう。本当にキツイ。でも恐らく体調が悪いからじゃない。辛いからじゃない。寝不足でも胸焼けでもない。

おそらくは心因性。

ああ……そういうえば、一つ気になることがあった。

オレンジ色の生徒会室。僕は彼女が来るまでずっと、太陽を見ていた。その色で瞳が染まるまで、たぶん見ていたんだと思う。

気がつくと、僕は机に向かって座っていて、彼女が何時の間にか目

の前に座っていた。

21. Confessions.

「先輩」

「ん？ なに？」

普段と変わらない、何時もの彼女。その様子は、魔女ではなく彼女めいじう。なんなのだろうか。自分がこんなにも悩んでいるというのに。

そう思うと、無性に、さらにムカムカとしてきた。

「さっきの、告白ですか？」

「こ、こここ、告白こゝひやく！？ も、もしかしてしてくれるの？」

噛まないでください。誰がするか。

「いえ、俺からではなく。ほら、さっき呼び出されていたじゃないですか」

まったく、中身はこんななのに、結構リア充しているじゃないか。中身はこんななのに。

そう、彼女は見た目は凄くいい。そして、せいかい外面そとも良い。

いや、素はこっちという保証はないのだが、こっちが素であつたなら、それは、その、嬉しいと思う。

「う、うん。クラスメイトの、男子に。で、でも断つたんだよ!？
だから大丈夫!」

何が大丈夫だというのはわからない。いや、断つたというのがか。
何故か胸のつかえが降りたような気がするけれど。
無論、まだ辛くは感じているが。

「そうですか」

「う、うん。だから、安心していい、よ。肴菜君の側に私はいる、
から」

会話の途中から、僕は彼女の手を握っていた。
彼女はそう言いながら、それを握り返してくれた。

22. Misunderstanding

「え、えと、今日は記念日だね。握手記念日」

えへへ、というのが本当によく似合う、そんな笑顔。

「手を、単純に握っただけじゃないですか」

「お、乙女おんなのこにはそれでも凄い事なんだよ!？」

大人モードじゃない先輩が語気を強めるほどの事なのか。

それは大事だ。まったくの大事だ。

首から上がテレビのウエディングドレスの女がチェーンソウを振り回すぐらいの、すごいことだ。

「俺から手を握ったのが、そんなに嬉しかったんですか？」

少し、からかってみる。すこーし、ね。

だって、もし勘ちが

「うん、それもそうだけど。それ以上に、えっと、嬉しかったのはね」

それ以上に？

「嫌だと思ってくれたんじゃないかって。私が、肴菜君以外と仲良くなるのが」

「っ」

そういうわけじゃないんだ。そうじゃないんだ。そう思っても。息がつまる。喉がヒクついて声が出ない。

「えっとね、ど、独占欲とか、持っていないんだよ？」

違う。それは違う。まったく、全然に。何時もと違って、異常に饒舌な彼女。

おい。やめろ。やめろ。やめろ。

「私は、肴菜君のこと、その」

やめろっ！

「な…にを、何を言っているん、ですか、小梅先輩」

つかえつつかえになりながら、そう、言うしかなかった。

23. Changes.

変わるこつてのは、怖いことなのだ。「僕」は思う。

気温が変われば人は風邪をひく。

食べ物が変われば人は食欲をなくす。

環境が変わってしまえば、関係が変わってしまえば。

最悪、人は死んでしまう。

二年前。僕の前からアイツはいなくなった。

アイツが決めたことだから、僕には何も言えなかったけれど。

それでも、僕が、俺が変わるには十分すぎた。

進歩なんて、変化なんて、不可避じゃないなら避けるべきなんだ。

変わってしまうことは、とても寒く、痛く、悲しい事なんだ。

とても辛いことなんだ。

だから。だから。

24. Are you all right?

「な…かく…ん、肴菜君!」

「え、ああ、はい、なんですか、小梅先輩?」

気がつく、目の前に先輩がいて、ぼ…俺は壁際にヘタレ込んでいた。

しゃがみ込んで、ハンカチで額の汗を拭いてくれているのはありがたい。でも、擦り過ぎです。額が赤くなっていそうだ。

「だ、大丈夫?」

そんな訳がない。腰も尻も痛いし、床も冷たい。

「とりあえずは。ただ」

「ど、どこか痛むの!?」

「額がこすれて痛いです」

「ご、ごめん!」

「あと、下着が見えています」

それはまあ、スカートでしゃがみこめばそうだろう。

冬服が長めであると言っても、やはりそんな体制でそこは隠すこと

ができないのか。

「す、スパッツだから！ それに、パンツじゃないから恥ずかしくないもん！」

そのセリフをココで言いますか。って、その体制で隠すとバランスが。

「きゃ！」

「あ」

倒れこんできますよね、それは。

25. And after all, I love you.

すごく顔が近い。彼女の瞳に僕の顔が写っている。その中の僕の瞳に、彼女の顔が写っている。

吐息が互いの赤い頬と髪を撫る。彼女の匂いがする。

何故か彼女の息が荒い。

曖昧に動く口元が、言葉を発せないままになっている。

そして、意を決したように真一文字に結ばれた唇が言葉を紡ぐ。

「さ、肴菜君」

震える声。

「なんですか」

「菊盃、肴菜、君」

フルネーム。

「私は、わ、私は」

嫌な予感がした。悪寒がした。先ほどまでの「発作」なんて比べものにならない、そんな。

「芒月小梅は」

後ずさる。にじり寄る。何時の間にか、手が重ねられている。その手が、握りしめられる。その手が、引き寄せられる。

「君のことが、好きです」

[illegible]

[illegible]

気がつく、僕は家の玄関で倒れていた、らしい。
アイツ曰く。「ひどい顔をしていたよ。正確に言うまでもなく」

21t025(後書き)

更新遅れましてすみません……

あ、もしよかったら、感想を頂きたいです。もし、よかったら。

C 10 to 12

まあ、あんな事があったから、じゃないかもしれないけれど。アレから理由もなく僕は一週間学校を休んだ。

両方の意味で無責任だと思うと、吐き気がして、また吐いた。でも、先輩はいつているらしいから大丈夫だろう、きっと。

そんな中、何も言われない方がキツイって解っているから、なのか。

アイツは時たま、小言を言っていた。

「じゃあ、僕は帰るよ。またね。正確に言えば二ヶ月後、かな？ バイバイ」とか何とか言ってアイツは出ていった。

ああ、「帰る」っていうんだな。「戻る」んじゃないくて。そう思うと、更に気が重くなって。

そしてその翌日の今日。

「そろそろ行かないと、正直、唯でさえギリギリな出席日数、やばいんじゃないかな？」

という訳で^{メール}。根本的あとこでアイツに逆らえない俺は、学校に出ていった。

授業やその他は、いつも通り。そう腫れ物扱い^{こじもておっ}だった。

さて、そんな放課後。俺はまたもや躊躇っていた。そりゃそうさ。どんな顔して会えばいいんだよ。というか会えてたまるかよ。

気丈に振る舞えるわけがない。仮面で隠しても、この間のようにも

う僕はボロを出している。

長い廊下を歩いて生徒会室の前まで来ていたのはもう癖になっていたからか。

扉にかけたてがカタカタとふるえる。そんな季節じゃないのに、汗が出る。

オレンジ色の孤独な世界で、葛藤する俺はどんなに滑稽なんだろうか。

泣きそうなそんな表情が、すりガラスに歪んで移る。

そんな時に、突然引っ張られた。

10. My dear you.

「いっ!」

「あ、痛かったっすか!？」

「ったり前だろうが!」

「フヒヒ、サーセン！」

埃の積もり様からして、やっぱり長いこと使われていないようだ。
そんなソファ―に押し倒された。

幸い。スプリングは聞いているようで、背中痛くない。

身体の上に軽い何かが、冷たく暖かい何かが乗っている。

オレンジ揺光を乱反射する中で、それを塗り変えるような最開桜花。フルプロツサム

桜幕千愛里がそこにいた。

何時ものような、長い髪を束ね損ねた様な髪で。何時ものように桜色の唇に笑みを浮かべて。何時ものように桜色の瞳に。

俺を映して。

11. A l l e r g y.

「改めまして、おひさつすセンパイ！」

「おう。ところで桜幕後輩。少し聞きたい事があるんだが？」

「千愛里」

と、呼べと？ 先輩ですら名指しじゃないのに、何をいてるんだコイツは。

「呼んでくれないと話さないし答えないっす！」

……ええい、回した腕に力を込めるな暑苦しい。

「千愛里」

「なんすか!？」

さて、スーパー言い訳タイム。

答えないというなら仕方ない。俺は露伴じゃないから、断ってもそれを覆すことが出来るような人間じゃないんだ。
それよりも。

「あなたはんどれはなんてことをなんばしするんですかょんじやコラアアアアア、あ？」

「答えないとダメっすかね!？」

「答えないとだめっすね」

Why and for what?

それを聞かない限り、アレルギー持ちの俺をこの埃アレルゲンの伏魔殿に連れ込んだことを許す気はない。

ああもう、鼻が詰まってきた。

「お前、アレルギー性鼻炎持ちにこの環境はキツイんだぞ！」

「知ってるっすよ！ 鼻が詰まってきたっすったから！」

お前もかい！

12. I just wanna.

「たまには歩きながらじゃなくて、座って話がしたかったんすよ！」

「座るどころじゃなくリラックスしてる気がするがな」

二人して寝っ転がってるわけだし。重くはない。寒くもない。柔らかい。決して嫌なわけじゃないんだ。

だからって、この距離感はないんじゃないか。付き合っているわけじゃないのだし。

いやまあ、付き合っているからってこの距離感がいいかといわれれば甘い、甘ったるい、口から砂糖が吐けそうな感じだけだ。

そして少し足りない気がしないでもないけれど。何がとは言わないし、何がかは分からないけれど。

脳裏によぎったのは……

「嫌っすか!？」

「いや、別に」

どちらかと言えば心地良い。何なのだろうかとも思う。だって。

俺は逃げていたはずだ。正面から向かい合いたくなくて。怖くて、痛いのが嫌で、彼女のその気持ちが恐ろしくて。

でも何か起こすわけでもない。単に時間がどうにか解決する迄、落ち込んでいるだけなのだろう。

ああ。最悪だ。そう表も動かない俺は、最悪だ。

「センパイ、どうしたんすか!？」

「いや、なんでもない。なんでも」

いいやつだな、と思う。

こんな俺を心配してくれるなんて。

そして、いつもよりも落ち着いた声で。

「いいんすよ、別に、気にしなくても。私は、先輩が変化しないのがいいって、変わらないほうがいいって思ってるって知ってますから。だから、何もしなくていいんすよ。応えてもらえなくても、私の気持ちは言葉にできなくても」

呼吸が出来なかった。安心感と罪悪感が、虫唾のように込み上げてくる。

「なん、だよ、それ」

俺の胸に埋まっているから、千愛里の顔は見えない。

「センパイ、前言ってたじゃないっすか『変わらないほうがいい』って」

「それは」

「それでいいんじゃないかって、先輩が望むんならそれでいいじゃないかって」

そう言いながら上がった顔は。

「でもそれじゃ切ないから、こうしてるんすよ」

泣いていた。

「鼻炎っす」

さいですか。

C 10t o12 (後書き)

今回は短めです。すみません。

M i n u s

「なあ、菊盃君。私と賭けをしないか？　なあに、簡単なことさ。もし君が「お断りします、芒月会長候補」

「おや、悲しいね。いいじゃないか。君に有利な話だよ？」

「古今東西、魔女と「魔女じゃないよ？」とにかく契約してうまく言った例を聞いたことはないのです」

「私は毒リンゴや糸巻きグルマを与えたり、コイルフラント鞘の主を取ったりはしないが？」

熱く断熱効果抜群の緞帳の裏、十人はいると思われた候補者ももうあと二人。他は「魔女が立候補する」という噂を聞いた時点でリタイアしていた。

その二人はパイプ椅子に腰掛けていた。

空調の届かないココはかび臭く蒸し暑い。

おまけに舞台用の証明の発する熱で、真夏の太陽のごとく。

キクサカサカナ菊盃肴菜は冬服の袖を捲り上げて、手で風を送り続けている。温度だけではなく、壇上という環境が、現状という状態が彼の発刊を促進していた。

汗ばむ肌に当たる微風は気持ちが良いが、それもほんの一瞬。

風の送れない背中や太ももなどに布が張り付く感触が、否応にも不快指数を押し上げる。

それだというのに、隣に座る会長候補は汗ひとつ書かずに涼しそうな顔をしていた。

流麗な顔に、意地悪な笑みを浮かべながら。

「だとしても、なにか嫌な予感がしますので。大体、俺から何を得ようってんですか。会長候補は」

「既に何でも持ってらっしゃるじゃないですか、かな？」

さっきの会話でかぶせられた腹いせか。タイミングよく、肴菜の発言を先読みして言い切る。それが間違いではないためか。

「空気は読めないようですね」

「うん、読まない。ところでどうかな？」

「何がですか？」

「ああ、話題の転換は無理だと思っていいよ。君がどうするかは、大体予想が付くんだ」

話題をそらそうとすることに失敗する。これが第二学年最強の才女と、髪の色以外に特色のない一塊の男子生徒との違いか。その実感と共に押し寄せる頭痛に肴菜はこめかみ辺りを抑えた。

「……内容だけは聞きましょう」

「聞いたら受けてもらうからね？」

「はあ？ ちょっと待」この選挙、どちらが会長になるかの勝負だ

よ。じゃあ、受けてもらうからね？」

異論と耳を塞ぐ動作よりも早く、丹花の色をした唇が言っただけのける。笑みを絶やさないうちあたり、確信犯であることに違いはない。会話のかぶせ方が無理やりで、いささか彼女らしくはなかったが。

「待った。俺が勝てるわけ無いじゃないですか」

全校生徒五千人超の八割弱が彼女のファンなのだ。そんな会長候補に対して、友達もいない肴菜が勝てる要素があるというのか。学年全体に名前も知られていない。人より目立つ要素など、髪の色ぐらいいのものだ。

そんな彼がなぜこんなところにいるのか。

それは、ろくに口も聞いたことのないクラスの男子に推薦され、あれよあれよという間に書類やその他事務処理が済まされていたからだ。

今思えば、このおんな会長候補の差金だったか。

「まあ、もう降りるとか許さないけどね？　さて、賞品を決めようか」

言外に圧力を込めて、有無をいわさぬ口調。彼女の二つ名の由来たる、その冷たい声。

従わなければ、等とすらも考えられないほどだ。

「そうだね……君が勝ったら、私を君の生徒会に入れてもらおうか。そして放課後、君は私が帰るまで生徒会室にすること。いいかな？」

「良くないですよ。なんで会長候補が僕のほうの賞品を決めるんで

すか」

とはいえ、彼女の持つ圧力の割には、驚くほど軽い物を欲しがっている。

「おや、君と相談するとも、君に選択権があるとも言っていないよ？」

高圧的な物言いにカチンと来る。だが、抵抗する手段もないし、ましてここで完全に敵にしては高校生活が「終わる」。

「では、会長候補がかった場合はどうするんですか？」

「そうだね……これを上げよう」

そういつて、彼女は自らの唇を指さす。

それはどういう意味だ、と聞き返すほど野暮ではない。だが、それは、予想以上にひどい事になるのではないか。

「受け取りを拒否する方向で受けさせて頂きます」

「いいよ。それでも。私は面白そうだと思うからだし。さて、同意の言質は取ったからね？」

何処まで本気なのか分からない口調に戻って、彼女は笑いながら答える。

そして。

『それでは、新生徒会長の発表です!』

緞帳が上がり始め越しに歓声が響き渡る。全校生徒マイナス二人分の視線が注がれる。

『新生徒会長は、皆さんご存知のこの人!』

そう言ってしまったのは、と肴菜は思ったが、元々誰の目にも明らか
な勝負だろう。

自分がここにいることが場違いなんだ、と冷静に思っていた。

『芒月小梅さんです!』

そうアナウンスが告げた途端に、割れんばかりの大歓声。
出来レースのような結果だが、大半は彼女のことは知っていても肴
菜のことを知らないのだから当たり前か。

『では新会長、校長先生からの会長証の授与の前にご挨拶をお願いします!』

すつくと立ち上がるその様ですら、絵になる。
壇上に居るのがいたたまれなくなってくるが、途中で抜け出すわけ
にも行かない。

ため気を吐いたところで、彼女は肴菜に向かって振り返る。

肴菜に注がれていた生徒らの視線が、一瞬一切消え去る。

「認知し許容することとは、自らのものとして消化するんだ。怖いことなんて無いんだよ。世界観なんて、自分の見える主観の中にしかない。だから、世界を受けいれるなんて、実は簡単なんだ。だから、どうかと惑わないで欲しい」

意味がわからない。言った言葉の意味をどうにか咀嚼しようと、肴菜は首を捻る。

故の彼女の行動を許してしまったのだ。力尽くでも阻止していれば……

『全校生徒の諸君。この度の選挙では私にその意志たる一票を投じてくれてありがとう。ここまで多くの支持を得られて、私は幸せに思う。』

オオオオオオオオオオオオッ！

野太い歓声。と黄色い歓声の入り乱れた祝福の声。

『だからどうか、この度の私のワガママを許して欲しい。本当に、申し訳ない。私はいまから、君たちの意思を踏み躪るような事をしちゃう』

動揺が広がる。そして……

『私は生徒会長立候補を辞退する』

W i c c a

夢を。幻想^{ユメ}を見ていた。

彼と会った頃のことを思い出して、私は頭を抱えて、泣きじゃくる。

サメザメとしたような、ハラリとしたような、そんな美しい涙じゃない。

恥も外聞もないかのように、私は唯泣きじゃくった。

赤子のように、稚児のように。

最近は何時もうそうだ。一人でいるときはないてばかり。ここから見える空が橙色に染まるまでに彼がこない日は、もう彼には会えないから。

そう思うと、余計に悲しくなって、私は更に声を上げて泣いた。誰もいないからイヤ。嗚咽が狭い部屋の中に響いていた。

ハンカチの半分が濡れた頃、今日も悲しいオレンジ色の生徒会室。

「……ううう」

泣きべそをかきながら、私は書類を整理していた。

肴菜君は今日も来ない。でもいつ来てもいいように私は彼の文まで書類をまとめる。事務仕事は得意だから。

涙が書類に落ちないように、カリカリと筆をすすめる。

虚しくなってくる。

こんなコトしていても仕方ないかもしれない。けれど、何かして
ないとうしろもうもない。

ひっく。ひっく。

横隔膜の痙攣が始まっている。なんて冷静に言ってる場合じゃない。
それはそうなのだけれど、冷静なワタシがそれを許さない。

「……終わっちゃった」

決済待ちの分がかなり溜まっている。それはそうかも。もう二週間
は来ていないし。

それでもある程度滞り無く進んでいるのは、この生徒会に与えられ
ている権限が本当に大したものじゃないから。

じゃなきゃ、こんな風に会長が休んでいても教師が何も言わないな
んてありえない。

それはそうだ。高校生に与えられる権限なんて、こんなものだ。
いっそ、彼を強制的に呼び出せるぐらいの権限があればいいのに。

なんて。

私はまた、そんなくだらないことを妄想して、自分を慰めて、忘れようとした。

そうじゃないと、溢れてしまう。

私は魔女だから。

芒月小梅は魔女だから。

彼が好きで、彼のそばに入れればよくて、彼のことを感じられればよくて。

彼をカセにして気持ちを押さえ込んでいた。

だめだだめだ。こんなふうに落ち込んでいては、彼が来た時に私じゃなくなってしまっているかもしれない。

変化を嫌う彼の前で、それでも今までの私じゃいられないかもしれない。

知らなかったんだ。好きだったのに。彼が変化が嫌いだったなんて。

ごめんなさい。

償い方が分からない。謝り方が分からない。会えないから。

指先がヌルヌルする。カッターで、指ごと切ってしまったようだ。

刃物を受かっている時に考え事をするから……

ドロリとした黒赤色の液体が溢れる。

テープだらけの指先たちが赤く黒く染まっていって、まるで私の心象風景のようだった。

痛みはない。絆創膏は、もう無い。

橙色の中。私は赤く染まったハンカチを巻いた手で、書類をまとめて部屋を出る。

私はこの長い廊下が嫌いだ。歩くだけだから、また考えてしまう。思い出してしまうのだ。

嫌な事を。嬉しかったことを。楽しかったことを。

長い廊下。その一箇所の窓が開いている。もう冬の匂いがする、そんな風。

オレンジ色の光が、溢れこんでくる。

その先を見てみると、敷地内が一望できた。

広い。

ここは校舎群の中でもかなり高いほうだっけ。

ここから見渡すかぎり、全て館タテガミ蠶学園の敷地だなんて、今さらながら吃驚する。

その全てが、橙色に染まっている。でも。

塗り潰されるような夕焼けの空の下で、決して染まらない桜の色の光が在った。

そしてその横に、私が恋しくて仕方ない、くすんだ^{ダーティブロンズ}金色も。

なんなの。なんなのよ。

なんで。なんで。

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんで。

私が変わってしまったからなの？私が君に告白したからなの？私じ
ゃなんでダメなの？変わってしまうから？変えてしまおうとしたか
ら？私が君を好きだから？

わかんない。いたいよいたい痛いいたい痛い痛い痛い痛い
いたいt a いたいi t a いたいi 痛いいたい。わからないよ。

割れた窓ガラスが、赤黒く染まる。

そんなに変わらないの？そんなに彼女がいいの？

そんなに私が嫌なの？

CALL 2

『で、相談は近くの知人より遠くの他人って訳かい？ いい具合に都合がいいね。いや、言葉に語弊があっちゃいけないから言うけれど、僕としては構わないんだよ？ いや、興味がないし他人ごとだから、なんてことなわけじゃない。僕はね、頼られるのもアテにされるのも大好きなのさ。へ？ 殊勝なもんだって？ いやいや君、僕は人類の味方で友なんだよ？ 願望を叶えることになんで躊躇しなくちゃならないのさ？ ましてや君はとりわけ僕の友人だろう？ なら、僕が手助けすることに何の遠慮があるのさ。だから気をつけてね、ワトキ……いや、一肴菜（g h o t i）。僕に何かを願う時は、その願いのかなってしまいう時なんだから、譲渡も遠慮も配慮も一切の呵責もなく叶ってしまうからさ。さて、何に都合がいいって言ったかっていうのはね、ほら、通信なら切れるじゃない。耳にいたいこととか、聞きたくない正論を相手が振りかざしたりした時にさ。本当に、文明の利器ってのは人を豊かにしつつ貶めるよね。プラマイゼロ、なのかな？ ああ、そういえば、ところで相談とはなんなのかな？』

「延々二時間にわたって説明したはずなんだが、いきなりそれか……」

『いやあ、しょうがないじゃないか。はっきり言って、答えが出る口ぶりなのだし。迷うことは無駄、とまでは言わないけれど、延々とそうするのは非生産的じゃないかな？』

「はあ……まあ、そうなんだけどさ」

『しかし背中を押してもらうための相談だなんて。気もまたずいぶ

んと女性的な一面を持っているんだね』

「女々しいって言いたいのかな」

『いやいやまさか。いや、まあ、そうとも言えるかな？ 考えても見れば、女々しいだの男らしいだのって、その異性に使う言葉じゃない？ 男が男らしいのも、女の子が女の子らしいのも当たり前なわけだし』

「あー、まあ……それはそう、なのかな？」

『で、コウメちゃんの事だっけ？ 先日のお礼とやらはうまく言ったのかな？ いやほら、よくよく考えてみれば、僕自身女性扱いでプレゼントを貰うから感想は言えるんだっただ、と思って気にしてたんだ』

「なあ、言いたいことが二つあるんだが」

『何かな？』

「お前との会話で先輩の名前を出したことはない。なんで知ってんだ？ あと、女性扱いってなんだ。女性扱いって。お前間違いないか 成人男性だって言ってたじゃないか」

『まず一つ目は秘密かな。そのほうがカッコイイし。そして二つ目は、僕は間違いなく成人男性だよ？ 見た目はともかく、戸籍上はね。あくまで、戸籍の上では』

「戸籍の上って」

『まあ、いいじゃないか僕のことは。問題は君の方だろう？ 実情、
一体どうするんだい？ トライアングラー 三角関係なんだろう、まるで全く正に見事
な』

「……」

『君の優柔不断の招いた』

『いいかげんにして欲しいものだよね、ほんとうに最近の主人公は。
いや、もう、正直知り合いじゃなければ押し倒してるよ』 オトコノコ

『いいかい、肴菜君。物事には限度ってものがある。ぼくはね、基
本的に誰がどれだけ恋愛をしようが知ったこっちゃない。でもね、
君』

『でもね、優柔不断は何も招かないよ。不幸だけ。ほら、時間は流
れてる。変わらざるをえないこともある』

「……じゃあ、どうしろってんだよ」

『自分で考えなさいな。そんなことは』

「なんだよそれ」

『きみがね、変化が嫌いだって言ったのを僕は覚えてる。それはそ
うだね、うん。知らないものは怖いもの。怖いんだからさ。恐ろし
さの根源はなんといっても未知だからさ』

「……」

『だから逃げるんだろう？』

「っ！！！！！」

『君の気持ちなんて知らないし、ああ、いやまあ解っては居るんだよその心境は、それはともかく』

「んで、そういうっ……ああ、っ！」

『ああ、ストップストップ。切っちゃやーよ？ これだから電話つてのは困るよね。切れるし、嫌なら耳から離せばいいんだし』

「……それが、利点だろうが」

『そうかい？それとても副次的なものだと思うけれど……なあ、肴菜君』

「……なんだよ」

『僕は、どこぞの変態親父のように君の傷口を切開しようって気はないんだよ。たださあ、ねえ？やっぱいいけない。このままじゃいけないよね？だから』

「だから？」

「だから、いざ推参おしてまいろうしようじゃないか、君のもとに」

夜風を切り裂いて、回る一対の二重反転ティルトローター。灰色のロービジ塗装に、大型バスほどもある大きな胴体。

知る者が見れば、アメリカ合衆国のベルとボーイング・バートルが共同で開発した鶚の名を冠したティルトローター機、V-22オスプレイに良く似ていると気がついただろう。

もっとも、オプスレイはローターは一重である。加えて周囲にそよ風程しか余波を与ず、しかも殆ど無音で市街地に飛来するなんてあり得ないだろう。

『「ちやお」』

受話器越しの声と肉声が被る。

屈強な黒人の男が、スライドドアを押し開ける。そのちょうど真ん中に、無骨な軍用機には似合わない豪華な椅子の上に。

受話器を耳に当てた人物が座っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1347x/>

Wicca・Craft

2011年11月21日16時17分発行